



第5回北部九州三県合同ボラ

第5回

北部九州三県合同

ボランティア研修交流会



第5回 北部九州三県合同ボランティア研修交流会が、七月二十四日(日)十時から佐賀市の「増田会館」において開催されました。「さわやか」からは、江頭理事長、山田、梶原両副理事長、寄友、高原両コーディネーターの五名が参加し、佐賀、長崎、福岡を合わせると、五十七名の関係者が結集しました。

会は最初に、今期亡くなられた、早田 勤前佐賀協会長、最所 孝「ふれあい佐賀」コーディネーター、河添 博志「さわやか」副理事長のご冥福を祈り、一分間の黙祷を捧げました。

「ふれあい」代表の鹿倉一代氏が開会の挨拶をされました。引き続き、「さわやか」の江頭理事長が来賓として挨拶をおこないました。江頭理事長は、三位一体改革、改革のグランド・デザイン、障害者自立支援法、移送サービス・ガイドラインなどを具体的に取り上げ、障害者にとって厳しい時代になると同時に、通院介護支援サービスが、



非常に重要になって来ると話しました。

研修
会は「がばいよかばいボランティア」と題して、体験発表がありました。「ふれあい佐賀」のボランティア松森淳子氏は、送迎ボランティアをはじめ、二ヶ月目ですが、今4人目の患者さんを送迎しています。その中で、①認知症の患者さんの対応の仕方 ②送迎中の患者さんとの会話など、カウンセリングの問題を提起されました。また、「ふれあい白石」のボランティア旗崎勝英氏は、日常の送迎の様子を話されました。

討論会に入り、富崎忠博相談役が司会・進行を行いました。討論会の議題は、次のようなものでした。

①緊急の事態が起こったとき、コーディネーターとボランティアさんと、病院との連絡など、どう対応しているか。
②介護タクシーは、病院内に入れないが、ボランティアはどうか。
③道路運送法八〇条の中で、



有償ボランティアとはなにか、また寄付行為についてなど。

④カウンセリングはどこまで許されるか。等々について、各事業所のコーディネーターや、関係者により、熱い議論が交わされました。

非常に有意義な研修会になりました。

第二部は、部屋を替え、交流会に入りました。

佐賀協の内田吉彦会長の挨拶があり、NPO法人「ほほえみながさき」の北川 修理会長の乾杯の音頭で、にぎやかに交流会が始まりました。

アトラクションでは、佐賀県富士町の内野太鼓が披露され、会場内には元気な子供たちがたたく太鼓の音が響いていました。また、艶やかな日本舞踊の舞がありました。その後各事業所の紹介が代表者によつて行われ、

あちらこちらで交流の和が広がっていました。

参加者全員



が空クジなしのクジを引き、それぞれ景品を持ち帰りました。

次回開催県の長崎県協会の西田 通雄会長が挨拶をし、開催を引き受けることを確認して、研修交流会は、無事に終了しました。

七月十四日に北海道の知床半島が、世界自然遺産に登録された。知床の大自然が多様な動植物を育てている。流水が多く、プランクトンを作り、魚が育つ。その魚が川をのぼり、熊やワシ類が食べる。食べ残しをカラスやカモメが食べ、骨に虫が群がり、森を豊かにする。森から栄養分が海に流れる・・・見事な生態系である。だからこそ、登録に値するのであろう。

またこの社会も、あらゆる人がいて、一人一人の役割があつて繋がっている事を自覚して大切にしていきたいと思う。

編集後記



⑥「慟哭」すること

乾ききった世の中になった、原因の一つに、国民が泣かなくなったことがあるように思います。義理・人情は古い考え方、涙を流したり、めそめそするのはみっともないという、無言の道理のようなものが、社会の中にあるような気がします。

十五年戦争の頃から、涙は禁物とされました。若い青年が召集令状一本で戦場に借り出されるときも、肉親は涙を見せたらいけず、そつと陰で泣いていたと聞いています。神風特別攻撃隊(特攻隊)も、突撃の前日に、水杯をして、別れをしましたが、この時も、隊員は一滴の涙も流すことは許されませんでした。

いつの間にか、日本人は泣くことを忘れてしまったように思います。特に「慟哭」するような人は、ほとんど見かけません。ちなみに、「慟哭」と言うのは、自分のためにでなく、人のために、大地に膝まづいて、手で大地を叩き、大声をだして、泣き喚くことです。テレビを視たり、映画を見て涙する人はいますが、人のために「慟哭」する人はほとんど見かけることができません。このことが殺伐な世の中の原因の一つだと僕は考えます。芥川龍之介、石川啄木などと同時代に活躍した小林多喜二という作家がいます。

多喜二は、戦争反対と主張した罪で、牢屋に入れられました。その時に、多喜二のお母さんのセイさんが、牢屋に面会に行き、多喜二の手をしっかりと握り、一言も言わず、「慟哭」しました。「多喜二、お前が地獄に行くなら、私も一緒に地獄に行くよ」という「慟哭」ではなかったでしょうか。セイさんは、後日「多喜二は裁判にもかけられず、獄死した。こんな非道なことがあっていいものか」と述懐しています。このセイさんの慟哭の涙は、多喜二にとっては、他の何ものにも代えがたい、涙だったと思います。

『心』は何処へ行ってしまったんだ!

【その参】

江頭 博幸

十五歳から二十五歳までの、若い青年が、帰るガソリンの無い飛行機に乗って、敵陣に突っ込んだのです。このように悲しいことが、何処にあるでしょうか?このような時でも涙を流すことが許されなかったのです。戦後は、アメリカナイズされた民主主義が宣伝され、アメリカ文化が大量に日本に流れこんできました。「日本人はウェットだ。もつとドライにならなければ」と、吹聴され、涙を流すことが、いけないような風潮になりました。この風潮は、物質文明、消費社会と見事にマッチし、ドライで、消費が美德の世の中を作りあげたのではないでしょう。



随想
近頃痛切に
感じる事

どんな有名な文学者や哲学者の慰めの言葉より、セイさんの涙は多喜二の慰めになったことか。
「世界で一番小さな海は涙の雫だという。命を産み育んだ海を僕は体に内包している。あふれる命の雫を抱えている美しい存在なのだ」
(「無限の荒野で君と出会う日」橋口亮輔著)より。



熱中症を予防しましょう!

熱中症は暑い時の運動や気温はそれほど高くなくても湿度が高い時に起こりやすくなります

★熱中症を予防するために

- ①水分補給をする
水やスポーツドリンクを一度に飲まずこまめに補給する
- ②体調を整えておく
体調が悪いときには運動をしない
- ③服装に注意する
服装は汗を吸いやすく、通気性の良いもの、着用する直射日光は、帽子等で防ぐようにする



★熱中症になったら

- ①涼しい場所に運び衣服を緩める
- ②首や脇の下を冷水につけたタオルや氷のうで冷やす
- ③意識を失っていたり、反応が鈍かったり、吐き気がある場合は病院に急いで運ぶ

